

赤梅檀と南縁草

新潟県医師会

理事 本 間

照



“妙なことを聞くがな、一家の主を旦那というのはどういうところから来たか、ご存じかい”

落語家・桂米朝「百年目」の一節。使用人に対してとても厳しい大番頭を、旦那が諭す場面である。南天竺には「赤梅檀（しゃくせんだん）」という立派な木があり、その根元には「南縁草（なんえんそう）」という草が生えているという。この南縁草を邪魔者と思って抜いてしまうと赤梅檀は枯れてしまう。南縁草は枯れては土を肥やし、その養分で赤梅檀は育つ。一方、赤梅檀が落とす露は南縁草を潤す。互いが互いを支え、互いが互いを生かしているのである。

“赤梅檀のだんと南縁草のなんを取って、だんなん、というな、これから始まったんじゃと。わしゃ、えー話やと思うたな、うん”

先日、健康経営の勉強をする機会があった。薄れゆく意識の中で、この話を思い出していた。

健康経営とは、職員の健康を経営資源と考え、その健康への投資が組織の活力につながるという考え方である。近年、企業だけでなく医療機関でも重要なテーマとなっている。

健康経営が求められる背景には、大きく三つの社会の変化がある。

第一は、高齢化と人口減少である。生産年齢人口が減少する一方、高齢者は以前より元気になり、働く高齢者も着実に増えている。健康寿命を延ばし、安心して長く働ける職場づくりは、これからの社会に欠かせない。

第二は、疾病と就労の両立である。がんをはじめ、多くの病気は「治して終わり」ではなく、「付き合いながら暮らす」ものとなった。一般企業では、病気を抱えながら働く人は四割を超えている。令和8年度からは、「治療と仕事の両立支援」が事業主の努力義務となるなど、社会全体が大きく動き始めている。

第三は、メンタルヘルスである。新潟市でも精神科・メンタルクリニックが増え、精神障害者保健福祉手帳の所持者はこの十数年で約三倍となった。労災認定でも精神障害は増加し、その背景にはパワーハラスメントやカスタマーハラスメントなど職場環境の問題が少なくない。私たち医療者も例外ではない。

ストレスチェックを実施している職場は多いが、「ストレスチェックをすること」が目的となっていないか。今この原稿を書きながら、我が事を振り返り、自らに問い直す必要を強く感じている。

健康経営の目的は何なのか。制度を整えることで、本当に実現したいものは何なのか。見失ってはならないのは、互いを尊重し、信頼し、支え合う風土である。

安心して相談できる職場であるか。誰かが困ったとき自然に手を差し伸べられる職場であるか。健康経営は制度を導入することではなく、働く人の声に耳を傾けることから始まるのだと思います。

大店の旦那は大番頭に言う。“今は、あたしが梅檀で、おまえさんが南縁草だ。有難いことに、ええ南縁草が生えてくれたお陰で、この赤梅檀は見なさるとおり、えら栄じゃ。で、及ばずながら出来るだけの露は降さにならぬと思うている。店に出たら、こんどはお前さんが梅檀で、手代や丁稚さんたちが南縁草じゃ。どうかお前さん、あの子らにも露をおろしてやってくださいよ”

この唄が教えてくれる「持ちつ持たれつ、あいみたがい」の心は、今の時代だからこそ大切なのではないだろうか。医療もまた同じである。赤梅檀と南縁草のように互いを育て合う職場でありたい。その支え合いの輪が地域医療へと静かに広がっていくことを願い、医師会としてもその歩みを支えていきたいと思う。